

汶川地震の記録と記憶伝承に関する基礎的研究

愛知県立大学客員共同研究員・非常勤講師
王晓葵

はじめに

過去の災害から来るべき災害を防ぐ智慧を引き出し、防災の社会安全システムの構築に役立たせることは、災害歴史研究のもっとも重要な目的かつ使命である。また国際的な災害史の比較研究は、災害に関する知識、防災の経験や教訓の共有、災害救援体制の整備にもつながる。こうした認識を踏まえ、本研究は日本と中国ひいてはアジアの災害伝承に関する比較研究を推し進める一環として、まず中国における地震災害の記録と記憶の問題に着目した。調査研究の対象は、2008年5月12日に発生した中国汶川地震である。

具体的な目標は、汶川地震に関するマスコミの報道、生存者の口述録、政府の公文書、専門家の記録、記念館・遺跡などさまざまなジャンルで散在している資料を収集、整理し、「震災の記録と記憶伝承」として分析することである。

目指すものは、震災時の人々の心理や行動パターン、罹災者の救済、行政の対策、情報の流れ、死者追悼など、地震に対するさまざまな社会的対応の様相を知ることができる資料群の構築である。こうした資料群を災害に関する「集合的記憶装置」として捉え、その総合的な調査分析を通じて、災害歴史民俗学的な立場から、災害に対する社会の防災能力を高める活動につなげていくことが本研究の目的である。

2008年8月、2009年1月、筆者は2回にわたって、被災地域の徳陽市、綿陽市、茂県汶川県、北川県などに 行き、汶川地震に関する報道のあり方、地震記念館の展示方法、被災者の体験を中心に調査を行った。この小論はその調査成果の一部である。

1. 汶川地震

汶川地震は、中国中西部に位置する四川省アバ・チベット族チャン族自治州（中国語表記：阿坝藏族羌族自治州）汶川県で現地時間 2008年5月12日14時28分に発生した地震である。「汶川特大地震」、「5・12汶川大地震」、「四川汶川大地震」なども呼ばれている。震源地はアバ・チベット族チャン族自治州汶川県（北緯31度01分5秒、東経103度36分5秒、深さ19km）である。地震の規模は中国地震局が公表した数字でマグニチュード8.0に達している。その地震による被害は極めて大きい。2008年7月22日、中国民政部の公表によると、死者は6万9197人、負傷者は37万4176人に達し、1万8222人がなおも行方

不明となっている。家屋の倒壊は 21 万 6 千棟、損壊家屋は 415 万棟である。中でも学校校舎の倒壊が四川省だけで 6898 棟に上り、地震により避難した人は約 1514 万 7400 人、被災者は累計で 4616 万 0865 人となった。震源地の川映秀鎮の死者、行方不明者は全人口 1 万人の約 8 割の少なくとも 7、700 人に上った。地震によって道路や電力・水道・通信などライフラインが寸断され、救助活動に大きな支障となった。

2. 汶川地震の記録と記憶について

2-1 新聞、雑誌などのマスメディアによる報道

1949 年中華人民共和国成立以来、災害報道は社会的不安や政府への批判などに繋がると心配され、報道の内容、時間などは共産党の宣伝部門のチェックを受けなければならない。そのため、情報の公開は極めて遅い。たとえば、1976 年唐山大地震、四川松藩大地震の時、情報の公開は非常に遅れ、唐山大地震の死亡人数、地震の強度なども 3 年後の 1979 年にやっと公表された¹。

しかし、今度の大地震では状況が大きく変わった。地震発生の当日、各新聞社、テレビ局、雑誌などによる素早い報道があり、直接テレビの生中継、新聞紙、雑誌の特別号もあった。内容からみれば以下のものである。

- ① 被害状況の報道（道路崩壊、人員の死傷、建物の倒壊など）。
- ② 救援活動の進展（道路の修復、人員の救助、物質の運送、義援金・物資の調達など）
- ③ 国内外の支援動向（政府、民間、外国の支援など）
- ④ 救援活動における体験
- ⑤ 社説類

もっとも多いものは、救援活動における「感動」的出来事の記述である。例えば、人民解放軍の兵士が献身的な救助、国の指導者が自ら危険な場所に被災者を激励、学校の教員は自分の子より生徒の救助を優先すること、国境を越えて世界中の国々からの暖かい支援など、こうした内容が報道の大半を占めている。その中で、特に人びとの心を捉えたものをいくつかを紹介しておこう。

- ① 北川県で、ある女性がひざまずいた状態で発見され、隊員が死亡を確認して別の場所へ移そうとした時、声が聞こえた気がして一人の隊員が女性の身体の下を探ったところ、赤ちゃんが生きていた。母親が覆い被さっていたお蔭で無傷で眠っていた。赤ちゃんの傍に置いてある携帯電話の画面に「も

¹ 王晓葵「唐山大地震における記念と追悼」 『愛知県立大学外国語学部紀要』（地域研究・国際学編）第 39 号 2007 年 3 月 125-147 頁参照されたい。

し生き延びられたら、お母さんがあなたを愛していたことを覚えていてね」とメッセージがあった。

② 日本の救援チームが亡くなった母親と娘の遺体を瓦礫の中から搬出した際、全員が黙祷と敬礼を捧げたことには、「生命を尊重する姿に、深く感動させられた」、「このような細かいことも、我々の目を覚まさせた」と中国のマスコミは写真付きで報道した。

③ あるHPで、地震で亡くなった妻を自分の体に結び付け、バイクで家までに向かおうとする男性の写真があった。夫は大きな悲しみに暮れながらも、妻の死後の尊厳を少しでも守ろうとする姿は、大きな反響を呼んだ。

④ 四川大地震被災者への街頭募金で7年間に蓄えた金銭180元（約2680円）をすべて寄付したという重慶のホームレスの男性の話題である。男性が残した紙には「7年前の肉体労働や、その後の流浪の生活でのごみ拾いや物乞いで溜めた金だ。四川の地震被災区のために、すべて差し出したい。」と書かれていたという。

こうした報道の仕方は、受け手に衝撃に与え、被災者への同情や哀悼を呼び覚ますこと、また支援活動や支援の輪を広げるには、非常に有効だといわねばならない。

しかし、このような報道は外岡英俊が言うように、「ある時点で『記録』と質を転換しない限り、被災地の外部の目は、『同情』と憐れみ」という上滑りの感傷として、いずれ忘れ去られるに違いない²。確かに、時間が経つにつれ、こうした記事が少しずつ減っていく。地震関連の出版物も一時成都の書店で専売コーナーを設けるほど大量出された（写真1）。が、次第に人びとの視線から消えていた。

外岡英俊がいう「記録」は、こうした「感情的」なものではなければ、単純な被災人数、金額などの統計的な処理されたデータでもない。その「データや事実をもとに、その記憶がうまれる現場にまで遡行し、生き生きとした実景を再現する」ものである。また、『世界ノンフィクション全集49』の解説者三浦朱門は、J・リーサーの『ロンドンの恐怖』と田淵巖の『大地は壊れたり』と比較しながら、「事件の規模全体をうかびあがらせるには、多くの個人の体験、統計、その他を充分に集めて、裁判官が多くの証言から事件を再現するように、史学者が資料によって過去を組み立てるように、事件を再構成しなければならない。これによって、当事者の誰も意識し



写真1 成都の書店の地震関係のコーナー

² 外岡秀俊『地震と社会 下』みすず書房 1998年7月 716頁

なかった新しい意味が発見されるものである。その意味では、リーサーの『ロンドンの恐怖』は一六六四年のペスト、翌々年の大火を扱って、みごとにこれを再現している³、という。外岡と三浦の主旨を合わせれば、客観的な資料を基づいて作り上げた「事件の全体像」と臨場感がある「実景」の再現は「記録」としての不可欠の要件だと思われる。

こうした基準で見れば汶川地震に関する報道や出版物は、本当の「記録」とは言い難い。1976年7月28日に発生した唐山大地震の全体像を見事に描く『唐山大地震』（銭鋼著、1986年初版、1996年修訂版、2006年地震30周年記念版）⁴のような作品の誕生は、しばらく待たなければならない。

ところが、過去の災害報道と比べ、明らかな変化もある。従来中国の災害報道は、災害そのものは中心ではなく、救助活動がいかに行われたかや、救助過程における「美談」が主な内容となった⁵。今回は、中国の主要な報道機関、たとえば中国中央テレビ（CCTV）、中国共産党の機関紙『人民日報』などは、被害の状況を全方位で世界に伝えていた。中央テレビの副局長羅明は、今回の報道の姿勢について次のように説明した。つまり、「災害はニュースではなく、救援こそニュースである、という旧来の報道姿勢を改め、被災地の真実を伝えることはわれわれの使命だ」⁶ということである。これは、マスコミ界の常識であるが、中国災害報道について、一つの大きな進歩といえよう。

2-2 ミュージアム展示における汶川地震

(1) 中国における地震を主題とするミュージアム

地震を主題とするミュージアムとして、中国には蘭州地震博物館、唐山抗震記念館（1976年唐山大地震を展示）、叠溪地震博物館（1933年叠溪地震を展示）などが存在する。蘭州の地震博物館は1989年に設立され、地震に関する科学知識の普及、展示などを行う。唐山抗震記念館は1986年に完成した際は、「唐山地震史料陳列館」と呼ばれ、建築面積は1488平方メートルだった。1996年に地震20周年を記念するため、政府はこの館を増改築し、「唐山抗震記念館」と改名した。新館は建築面積5380平方メートルとなった。

館内の展示は『今日唐山--唐山市建設成就展覧』といい、全部で9つの区分に分かれて、そのなか、第2部分は直接に地震と関連する。一部の実物と写真を展示しており、例えば、地震の時刻に留まった壊れた時計、崩壊した建築の写真などである。地震による被害の紹介以外には、生存者救助、復旧作業の状

³ 『世界ノンフィクション全集 49』筑摩書房 1963年12月 423頁。

⁴ 日本語訳は2社が出している。1. 『唐山大地震-今世紀最大の震災』蘇錦・林佐平訳朝日新聞社。2. 『二十四万人の屍-ドキュメント唐山大地震』芦川和美・孫国震訳（日中出版社）。

⁵ 同注1

⁶ 梁曉濤編『震撼 電視檔案 5・12 汶川大地震備忘』中国民主法治出版社 2006年6月

況も紹介されている。そのほかの部分、たとえば第1部には唐山の歴史沿革、地理資源など及び地震後の建設状況を紹介する。第3部から第9部までは地震後唐山各産業部門の復旧・発展の成果を紹介する。

この記念空間の中では、地震による被害は主に死傷者の人数、物質損失の金額等によって紹介する。またこの地震を名称とした記念館のわずか9分の1の部分のみが地震と関係がある展示である。館内の展示の大部分は唐山の歴史・地理・物産などである。それと同時に重点的に震後唐山の復旧成果を紹介する。これは「抗震」という館名に合致している。しかし、この地震による重大な人命の死傷及び悲しみは、この記念空間においては十分反映されたとはいえない。つまり、24万人の死、16万人の重傷及びこれによる被災家庭、親族及び社会にもたらした創傷よりも、政府、党、および唐山人民の建設成果の方がもっと重要視された。

(2) 5・12汶川大地震特展

汶川地震後、成都市近郊の大邑県建川博物館で地震の特別展が開催されていた。この記念館は建川博物館聚落といい、四川省成都市西大邑県安仁鎮に位置し、樊建川という不動産会社を経営し大成功した民間人によって作られた博物館である。その記念館は面積30万平方メートルで、中国民間最大の博物館といわれ、2005年開館（一部建設中）した。その構成は、抗日戦争、中国民俗、新中国収蔵品の三部分からなる。汶川地震後、樊建川は、一部使われていない館舎を利用して、「5・12汶川大地震特展」というテーマの特別展を開催した（写真2）。展示の内容は、被災地域から集められた遺品、写真が中心である（写真3）。

展示の入り口に数枚拡大した写真を飾っている。内容は脱線した列車、崩れた山、倒壊した家屋などで、写真の隣に、数台の壊れた車の実物が展示され、被害の大きさを示唆している。入り口に入ると、地震発生時間を示す2時28分で止まっている壊れた時計が置かれている。

展示室には、時間順で5月12日～6月12日までの毎日の被害の状況、救援の進展などを、写真と実物を用いて、日記の形で克明に紹介している。



写真2 地震展示の看板

展示の構成

展示品から見れば、全体の構成は、①直接震災による被害をとどめた物品

類、②新聞、雑誌など印刷物、写真など、の二つの部分に分かれるが、時間順に沿って展示しているので、二つの部分を分けて配列するのではなく、被害、救助、追悼などの内容を同じ空間で展示している。つまり、一般的な災害展示でよく使われる①災害②被害③救援④復興という「災害」から「復興」にいたる時間を追体験するような展示手法と違って、すべての内容を時間軸に沿って「そのまま」同時進行的に再現している。

また、館内に遭難者の写真を壁に飾り、祭壇を設けている。見学者はそこで花を捧げたり、線香の代わりに蠟燭を用いたりして死者を哀悼することができる。さらに、出口の近くに、一面の壁に見学者が自分の思いを貼るためのスペースを設けられ、人々は被災へのさまざまな思いを書いてここで残すことができる。従って、この展示は単純に事件を再現する場だけではなく、自分の感情、思いを「表現」できる場でもある。

展示理念

展示の最後の結びとして、館内に次のような言葉で展示の理念を記している。即ち、「銘記災難、吸取教訓 記念逝者 勇敢生活 雨過天晴 天府花開」（災難を銘記し、教訓を生かす。死者を記念し、勇気を出して生きる。雨がやんだら晴れになる、我が故郷は必ず復興する）である。

つまり、悲惨な災害を忘れないが、復興中心、未来志向という人びとに勇気付ける展示方針と思われる。しかし、重要なことは「教訓を生かす」ことだ。展示の内容からみれば、この地震が頻発する地域で、以前多くの地震が発生したが、なぜ地震に関する防犯意識は十分ではなかったか、多くの学校、公共施設がなぜ被害が大きかったのかなど、これについての内容は見当たらない。

この特別展を常設展にし、正式な記念館を建設する計画がすでに定められ、2009年内に完成する予定である。現在工事が進むと同時に、人々に展示品の提供も呼びかけている。完成する「汶川地震記念館」には、展示品が一層豊富になると間違いないが、どのようにこの大地震の「教訓」を展示するのか、注目したいところである。



写真3 地震の館内展示

3. 経験者の体験談

中国においては、災害経験者の体験談、関連するさまざまなうわさ、俗説、伝説、迷信などを収集する活動の重要性が次第に認識されつつある。特に1976

年唐山大地震の30周年の2006年頃に、民間において、政府の災害記録と記憶へのあり方に対する反発が顕在化し、民間レベルの調査、収集活動が活発化となった。2006年に『唐山大地震親歴記』（団結出版社）が出版され、それは中国において最初の地震体験談であった。その内容は、唐山大地震の被災者たちが当時自分の状況及び救助された経過、その後の生活状況などを書いたものである。

今回の調査では汶川地震の被災者に対して、筆者が聞き取り調査も行った。その内容は以下のものである。

- ① 地震発生の際の状況、自分と周辺の人びとの反応。
- ② 救助されたときの状況。（自力脱出、近所の救助、外部の救助）
- ③ 救助活動に参加したか。どのような行動をしたか。
- ④ 自分の親から地震についての話を聞いたか。どのような話か。
- ⑤ 今回の体験をどのように自分の子孫に語り継いでいるか
- ⑥ 救助された後、一番困ったことは？
- ⑦ （少数民族に対する）当該民族は地震に関する伝説や神話など聞いたことがあるか、その内容は？
- ⑧ 死者の遺体をどのような方法で処理したか、祭祀などがどのようにおこなわれたか。
- ⑨ 救援、援助などに対して、なにか不満のところはあるか。
- ⑩ 以前は自分の家を建てるとき、地震に対しての配慮があったか。

聞き取りは以上の問題点を中心にして展開されたが、すべて紙面どおり一問一答ではなく、語る者がその場で思い出したものを忠実に記録することに努めた。その調査のデータの整理、分析は、今現在完成していないが、現段階において、次の問題点の存在が明らかになった。

- ① 被災地域の人々は、地震に関する知識は殆どない。歴史上の地震は文献資料で数多く記録されたが、人びとの口頭伝承のレベルで殆ど存在せず。学校教育にも防災にかんする内容はほとんど取り入れていない。従って、人々は地震に対する防備意識は極めて薄く、家づくりや日常生活での行動において、被害軽減するような施策は殆ど行われていない。例えば、ある小学生は地震が発生したとき、学校の運動場で遊んでいた。突然風が吹き始め、大きい音が聞こえたという。彼が思わず教室に向かって走り出し、入ろうとしていた。幸い先生に呼び止め、被害が逃れたという。今度の経験を通して、今後地震が発生する場合、どのように行動すればいいかと聞いたら、彼はしばらく考えて、「やはり先生の指示に従う」と答えた。
- ② 地震後、救援者が入るとき、必要な機械、道具などは極端に不足している。それは、1976年唐山大地震のときにすでに経験したものだが、当時の教訓は殆ど生かされていない。
- ③ 医療救急体制の不備。調査によると、多くの人が救助された後で亡くな

った。その原因は医者や医薬の不足によるものである。

- ④ 地震後被害者を救助する際もっとも効果を挙げたのは、外部から入った救援チームである。被災者間で互いに救助することは、鉄筋コンクリートの建築の場合はかなり限界がある。

結び

汶川大地震はまだ一年も経っていない。現在救済と復興はまだ進行中で、記録と記憶の作業は進んでいる段階で、その全容はまだはっきり把握することはできないが、1976年の唐山大地震と比べ、明らかな変化を見ることができる。特に、災害報道姿勢の変化が大きい。従来の救援報道中心から災害報道中心へ変わりつつある。民間記念館は人びとの被災や救助、復興の様子を示す記録や資料を意識的に残そうとした。これはおそらく中国において初めての試みである。しかし、今回の大地震は大きい被害を齎した原因のひとつは、過去の経験や教訓が殆ど生かされていないことであると思われる。

外岡英俊は、蔵持不三也によるペストとヨーロッパ文化との関係についての研究に触れ、「欧州はペストを通じて、死を銘記し、災害の惨禍を伝え、被害を防ぐ独自の文化を作り上げた。その集団的な記憶の集積は、災害に対する社会の伝承の「保水力」を高め、過去の災害体験を容易に水に流したり、風化することを防いでいる。社会全体が、記憶を喚起する装置となっている」⁷と指摘し、災害に関する記録と記憶は社会の安全保障に対して如何に重要かを強調した。汶川地震の教訓は、正にそれを証明したものである。われわれは、それを機にして、関連する記録と記憶資料をしっかりと検証し、今後の防災、減災に生かす方法を考えなければならない。

■付録 汶川地震に関する出版物

1. 新聞、雑誌、書籍

梁曉濤編『震撼 電視檔案 5·12 汶川大地震備忘』中国民主法治出版社 2006年
四川日報報業集團等『四川汶川大地震 記實 我們在一起』四川文芸出版社 2008年

陳磊等編『面對災難 我們選擇堅強』四川少年兒童出版社 2008年

楊文祥編『汶川地震 15天』中国發展出版社 2008年

本書編寫組『一切為了生命—抗震救災中震撼人心的瞬間』人民出版社 2008年
成都軍區政治部『重兵汶川』四川人民出版社 2008年

中国教師報編『教師感動中国』華東師範大學出版社 2008年

焦虎三『留住美好故川』中国輕工業出版社 2008年

趙亞輝『永遠的汶川—大地震前後的珍貴記憶』化学工業出版社 2008年

本書編纂組『人民日報抗震救災言論選—時代最強音』人民日報出版社 2008年

2. 地誌

⁷ 外岡秀俊『地震と社会 下』みすず書房 1998年7月 726頁

- 『茂汶羌族自治州誌』四川辞書出版社 1997年
『松潘県誌』民族出版社 1999年
3. 法令集及び宣伝物
『汶川地震災後恢復重建條例』法律出版社 2008年
『汶川地震災後恢復重建條例 注釋本』法律出版社 2008年
王一儒編『大力學習弘揚居偉大抗震救災精神 深入推進黨的建設新的偉大工程—胡錦濤在抗震救災先進基層黨組織和優秀共產黨員代表座談會上的講話 學習讀本』人民日報出版社 2008年
中共四川省委宣傳部等『向生命致敬—四川抗震救災新創歌曲選』四川文芸出版社 2008年
4. 防災パンフレット
北京師範大學心理學院編著『災後心理救助與心理重建—5・12大地震後的自我應對指南』中國輕工業出版社 2008年
四川少年兒童出版社『少年兒童地震防護手冊』四川少年兒童出版社 2005年
姚非拉『青少年地震應急手冊 漫畫版』二十一世紀出版社 2008年
5. 文学作品
『青年作家』青年作家雜誌社 2008年
中央テレビ編『生命禮贊—5.12 紀念詩文集』中國民主法制出版社 2008年
聖野編『大愛頌—獻給抗震救災的詩』浙江少年兒童出版社 2008年
6. 写真集
『四川 5. 12 汶川大地震瞬間記憶』四川畫報 2008年

■著者プロフィール

王曉葵 (OU Gyooki) 愛知県立大学外国語学部外国人教授 (2009年4月から非常勤講師)、多文化共生研究所客員共同研究員

1964年11月3日に北京で生まれ、学生時代に親の転勤で新疆、徐州、南京などほぼ6,7年毎に居場所が変わる。1985年中国南京大学中国言語文学学部を卒業した後、留学生部で中国語教育に従事し、1990年4月に来日。2001年3月名古屋大学国際開発研究科で博士号を取得。2005年愛知県立大学外国語学部教授(2009年3月まで)。

現在、戦争、災害、事件に関する記録と記憶の日本と中国の比較研究を行っている。近年、殆ど年に二回ほど、中国、日本において、戦争・災害関連の記念物、遺跡の現地調査を行っている。趣味は美食、調査の傍ら食べ歩くことはフィールドワークの原動力の一つである。

